

# もっと知りたい読者のために

## 『デカメロン』

(1353年) ジョヴァンニ・ボッカッチョ

枠物語の構造を持つ『デカメロン』は、イタリアの作家、詩人で、学者でもあるジョヴァンニ・ボッカッチョ(1313年～75年)が書いた100篇の物語集である。個々の話をまとめる枠になる物語は、女7人男3人の若者10人が、疫病の蔓延するフィレンツェを逃れてフィエゾレにほど近い魅惑的な邸宅で過ごす、というものである。一同は毎日全員がひとつずつ話をすると決め、そのようにして10日間にわたって100話が語られる。その日の座長に指名される者が題目を選び、語られる話に向けての約束事を取り決める。毎日締めくくりにだれかがカンツォーネ(歌)を歌い、ほかの者は踊る。こうして精妙に書かれたためくめくめ物語集ができあがり、悲劇の愛の物語やみだらな話から、人間の意志の力の話や女が男に仕掛ける計略の話に至るまでが集まった。これはルネサンス期とそれ以降の作家に刺激を与えた。



接吻されても色艶消えぬ、  
女の唇、春の宵、  
月がのぼればまた光る。  
『デカメロン』  
ジョヴァンニ・ボッカッチョ



## 『ガウェイン卿と緑の騎士』

(1375年ごろ)

2,500行ほどで構成される『ガウェイン卿と緑の騎士』は、中英語の頭韻詩の例として非常によく知られている。作者不詳の、騎士道冒険譚の詩であり、舞台は伝説のアーサー王を頂く宮廷の初期に置かれている。美麗に綴られた魔法の物語は心理的洞察に満ち、英雄ガウェイン卿が謎めいた緑の騎士と出会ってからつぎつぎと直面する試練と誘惑を詩の形で語っている。

## 『井筒』

(1430年ごろ) 世阿弥元清

作者の世阿弥元清(1363年～1443年)は日本を代表する能作者であり、能楽芸論の大家でもある。この曲の題名は井戸のまわりの囲い枠に由来し、曲全体は僧侶と里の女が出会って、女が僧に話を語るといふ枠構造になっている。ある男と女が幼いころ井戸で遊び、互いに惹かれて結婚する、という物語(『伊勢物語』の挿話)がもとにある。

## 『アーサー王の死』

(1485年) トマス・マロリー

1485年にウィリアム・キャクストンによって印刷されたが、それより早い稿本版は1470年ごろから存在していた。これは伝説のアーサー王と円卓の騎士たちの物語の集大成である。フランス中世騎士物語を



むき出しの美しい剣が  
尖端だけ突き刺さっていた……  
この石と鉄床よりこの剣を  
引き抜いた者は、全イングランドの  
正統なる王として生まれた者だ。

## 『アーサー王の死』

トマス・マロリー



もとに英語の散文に翻訳して編集したのは、騎士にして兵士、作家、イングランド議会の議員であったトマス・マロリーである。マロリーは物語を年代順に配列して、アーサー王の誕生からはじめ、騎士たちの友愛話を中心にまとめあげた。

## 『アマデイス・デ・ガウラ』

(1508年) ガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボ

モンタルボ(1450年ごろ～1504年)がスペイン語で記した散文の騎士道物語『アマデイス・デ・ガウラ』が生まれたのはおそらく14世紀前半だが、最初に書かれた正確な時期や作者は不明である。4巻に及ぶモンタルボ版は、端整にして勇敢で心やさしい騎士アマデイスの伝説とオリアナ姫への愛を語っている。アマデイスは姫に尽くして騎士道の冒険に臨み、巨人や怪物を相手に恐れを知らぬ手柄を立てる。この作品の気高い理想や勇壮さや情感は、中世騎士物語の模範となった。

## 〈旅船〉3部作

(1516年、1518年、1519年)

ジル・ヴィンセンテ

〈旅船(バルカス)〉3部作は、「ポルトガル演劇の父」と呼ばれる劇作家ジル・ヴィンセンテ(1465年ごろ～1573年)による宗教劇である。1幕劇3部で構成され、『地獄への旅船』、『煉獄への旅船』、『天国への旅船』から成る。風刺と寓意を帯びたこの3部作は、ヴィンセンテの卓越した劇作の頂点とされるものであり、あらゆる階級を反映する船客たちを登場させ、その大半が天国にはいるうとして不首尾に終わるさまを描いている。

## 『ウズ・ルジアダス』

(1572年) ルイス・デ・カモンイス

『ウズ・ルジアダス』は10歌から成る叙事詩であり、大詩人デ・カモンイス(1524年～80年)がヴァスコ・ダ・ガマのインド航路遠征を順にたどって物語った作品である。導入部のあと、川の精への祈願と、国王セバステアンへの献辞が終わると、つぎつぎと登場する語り手によって言辞が格調高く雄弁に語られる。ガマによってポルトガルの歴史が語られる箇所もあれば、冒険や嵐、さらにはギリシャとローマの神々による干渉の描写もある。作品全体がポルトガル人とその偉業への賛歌となっている。

## 『妖精の女王』

(1590年、1596年)

エドモンド・スペンサー

イギリスの詩人スペンサー(1552年ごろ～99年)の代表作である『妖精の女王』は、宗教的、道徳的、政治的寓意をこめた作

品である。舞台となる伝説のアーサー王の世界は、チューダー朝のイングランドを象徴している。全6巻で構成され、巻ごとにひとりの騎士の偉業が語られて、それぞれの騎士が貞節などの道徳的美点を表している。騎士たちは妖精の女王グロリアーナに仕えるが、これは女王エリザベス1世を想起させる。スペンサーは12巻にする構想をいっていたが、46歳にして死を迎え、完結を果たさなかった。

## 『ル・シッド』

(1637年) ピエール・コルネイユ

5幕から成る韻文悲劇『ル・シッド』は、フランスの悲劇作家ピエール・コルネイユ(1606年～84年)の作品であり、フランス新古典主義悲劇の代表例と見なされている。スペインの国民的英雄エル・シッドの物語に着想を得たこの作品は、ル・シッドが頭角を現す話と、未来の義父に対して決闘を申し入れる話を語っている。決闘に臨んで主人公は、愛する女と家の名誉のどちらをとるかを選択を強いられる。

## ジョン・ミルトン

イギリスの詩人ジョン・ミルトンの名を最も世に知らしめた『失樂園』は、英語で書かれた叙事詩の最高傑作と見なされている。ミルトンは1608年にロンドンのチープサイドで生まれ、まだ学生のころから執筆活動をはじめた。しかし、1642年に国内で大内乱が勃発すると革命を支持する政治活動に身を投じ、小冊子を作って宗教と市民の自由を擁護した。1649年にチャールズ1世が処刑されてイ

## 『失樂園』

(1667年) ジョン・ミルトン

ミルトンの最高傑作であり、リズムと響きの至高の偉業である叙事詩『失樂園』は、聖書にある物語に基づいて、アダムとイヴが転落し、それゆえ全人類が神の恩寵を失ったと歌う。1674年の最終版で12巻(初版では10巻)構成になったこの詩は、ふたつの主題をからみ合わせている。ひとつは神と天国に対する悪魔の反逆であり、もうひとつはアダムとイヴが受けた誘惑とエデンの園からの追放である。

## 『フェードル』

(1677年) ジャン・ラシーヌ

フランスの劇作家ジャン・ラシーヌ(1639年～99年)が書いた感動的な悲劇『フェードル』は、フランス新古典主義を代表する傑作である。5幕から成る韻文劇で、ギリシャ神話からとったその題材は、古典時代の劇作家エウリピデスとセネカがすでに作品にしていた。ラシーヌ

ギリシヤ王政が倒されたのを受け、ミルトンは国務会議の書記官になった。1654年までには完全失明したが、詩や文章を助手に口述して執筆活動をつづけた。1660年の王政復古を受けて、代表作の数々を創作することに専念した。1674年にロンドンで65歳の生涯を終えた。

### 主要作品

1644年『アレオパジティカ、言論の自由論』  
1667年『失樂園』(上記参照)  
1671年『復樂園』  
1671年『闘士サムソン』